

## 五十周年記念誌によせて

宮内 幸男

一九五七年九月、わらじの仲間が創立された。まだ二十歳代前半の若者たちが沢山の夢を抱えて集ったと聞く。その後、夢を同じくする仲間たちが集い、研究し、議論をして、悩んで、ひたむきに山に向かったことだろう。舞台から退くものがあれば、あらたに参入する者がいた。一旦しりぞくも再び現れる者がいた。居るんだか居ないのか曖昧な者もいただろう。幾つかの山岳会を渡り歩く者もいた。何時まで経っても退場しそうにないしづとい者もいた。山のついでに生涯の仲間を得て仕合せな家庭を築いた者もいた。誰もが自分の山を模索し夢を実現しようとした。その関わりは密度にはおのおの濃淡があったろう。だが、そんな一人ひとりがこの会を支えた。そうやっていつの間にか五十年が経って、今日に至った。

山だけを接点にした集まりが、こんなちっぽけな町の山岳会が、もちろん様々な消長はあったにしても、消滅することなく半世紀に亘って持続した。これだけで奇跡といっている稀有な出来事だと私は思う。そこには様々の苦労や挫折があっただろう。でも誰かがその度に踏ん張ってきたからこそ現在がある。冒頭、あえて悩んで、と記した所以だ。

一口に五十年という。その長きに亘って全てを知っているのは、いまや創立会員の関根幸次氏ひとりだ。かくいう私は、その後ずっと下って一九七五年にこの会の仲間となった。私もまたいつの間にかその半分以上の歴史に付き添ってきたことになる。今年もまた嬉しいことに新しい仲間が増えて元気に山に向かっている。いつか成長して今度は彼・彼女らがまた新しい仲間を育てていくだろう。そうやって会は続いてきて今日を迎えることができるのである。

その活動は堅実なものだった。耳目を驚かす超人的な活躍もなければ初登攀もない。目立たぬ山域の谷や尾根を飽きもせず営々と辿って来た。その活動になにがしかの特長があるとすれば、なによりも山域にとことん拘ってきたことだ。これはいまや組織的な対応というよりむしろ個人プレーの観を呈してはいるが、それは登山の本来あるべき姿だと思う。誰もがそうでなければならぬなどと言うつもりはないが、自らのハイマートを持つこと、一人ひとりがそれぞれの心の山を堅持すること、これは山を指すものにとって夢であり憧れであると思う。そのうえで、志を同じくする仲間が力を合わせて特定の目的に取り組んでいけるならば、感無量、私ならもうなにも要らない。

一九五八年五月以来毎月の活動報告たる月報が一度として途切れることなく発行され続けてきたこと、たぶんこれも自慢に値することだろう。現在は通算六一九号（二〇〇七年十月現在）を数える。我が家の三十数冊に及ぶ古ぼけたファイルは、家人からいくら邪魔だと言われても、なるほど改めて翻いたこともないのだが、私にとっては何物にも代えがたい宝物である。いまや外注印刷に出している月報だが、かつては手をインキだらけにして輪転機と格闘していた。集会の前日、若林岩雄宅に泊まりこんで徹夜でやった作業など

今となつては懐かしい。

また、一九七九年度以降、会活動年度報告書（年報）が発行され続けていることも自慢していいことのひとつだろう。それ以前は十年毎にまとめられ、年報一、年報二として出ている。また別に合宿報告として叢書を発行していたが、これは私もほとんど知らない世界に属する。これら会報の発行は、いうまでもなくその存在意義を会員の一人ひとりが自覚して会務に携わってきた賜物である。

会運営についても同様で、確かに一人のスーパースターもカリスマもついに生みだすとはなかったが、さいわいにその時々を中心に中心的な役割を担う者が自ずと、しかもうまく具合に継起的に、現れては代替わりを進めてきた。代表とリーダーとか編集長とか幾つかの役職に名前を連ねた者があれば、そうでない者もあったが、これもまた、その誰もが会を支え育ててきたのである。特筆すべきは、長期間に亘って事務局を引き受けてくれ、今も続けていてくれる、古くは関根幸次家、現在は田中茂雄両家の一家を挙げての献身的な協力についてである。毎週末の数パーティの下山報告、それがいつ果てることなく、何時までもつづくのである。これを一手に引き受けることなど一体誰ができるだろうか。その手間、心労とも並大抵のことではないはずだ。いまさらながらではあるが、あらためて両家に対して、深甚の感謝を捧げたい。

むろんこの五十年は、喜ばしいことばかりではなかった。楽しいはずの山行のなかで死亡事故を繰り返してしまっている。私たちはその都度、重大な反省と再発防止の固い決意を重ねてきた。だが、重大事故は止まらない。五十年間で八人という、あまりにも多くの仲間を私たちは失っている。犠牲を払わなければ達成できない活動などないし、あつ

てはならない。これ以上の仲間を山で失ってはならない。この五十年という記念の年は新たな決意を示す節目の時でなければならぬ。

この会は一体どういう会なのか。世人に沢登りの会だと言われ、そう公言する仲間も確かにいる。だが、すくなくともわたし個人はそう思ったことはないし、そういう会でありたいと考えたこともない。山は総体として楽しむ世界である。四季おりおり様々な登り方をしてみて判るものがある。美しく穏やかな空間があれば人を寄せ付けない険悪で危険な地帯がある。落ち着いてあらゆる状況に対処できる技術と経験を積んで、はじめて到達できる世界がある。そのときにやっと心に浮かぶ何かがある。そのためには、時代遅れの表現かつ定義抜きで乱暴だが、いわゆるオールラウンドな山との付き合い方がやはり大切だ。特定の、決まりきったことばかりをいくら繰り返していても、どんな所でも自由自在に歩き回れる本当の技量は身に就かないと私は思う。

これからこの会はどうなっていくのか。これまでのように曲がりなりに世代交代が続くのか、誰か取りまとめ役が登場してきて仕切っていくのか、伝統や経験というべきものがあるとしてそれらが受け継がれあるいはさらに発展していくのか、それは誰にも分からない。わらじの仲間の五十年、そこに何を見るのか、さらにその先に何が見えるのか。懐古趣味もいい。振り返ることさえしないのもいい。そんなこととは無関係にただ山に遊ぶのもいい。それは、会に関わる一人ひとりにかかっている。一人ひとりがやりたいようにやる。それが一番だ。そのうえで、ひとつひとつの支流がいつか一本の流れとなつて、大河にでもなることがもしあれば、これほど嬉しいことはない。



北アルプス・鹿島槍ヶ岳天狗尾根 1966年1月

第一章

座談会 わらじの仲間の半世紀から見えるもの

15

第二章

歴代代表・チーフから 人が時代を創り、時代が人を創った

29

回想・わらじの仲間

野口冬人

31

五十年の断片 綴るがままに

関根幸次

42

地域研究と合宿

金子一郎

47

沢登りの変遷とわらじ

若林岩雄

51

飯豊連峰の谷と雪尾根

大津政雄

58

越後の山から、黒部別山そして剣へ

宮内幸男

71

第三章

五年リレーでつなぐ 世代に追う活動記録 後継者たちの系譜

75

一九五七年～一九六二年

わらじの仲間一九五七～一九六二「忘れ残りの記」

永瀬保夫

76



南アルプス・尾白川本谷 1972年10月

一九五七年～一九六二年の記録より

四十五年前の思い出 夏合宿・未丈ヶ岳集中——一九六二年七月  
大蛇尾紀行

88 80

一九六三年～一九六七年

創立期から成長期へ。那須山塊から越後への模索

92

一九六三年～一九六七年の記録より

谷川連峰・赤谷川笹穴沢  
帝釈山脈の冬山を行く——はじめに  
安ヶ森峠から枯木山

越後・巻機山 登川米子沢

103 101 99 97

一九六八年～一九七二年

充実していた遠き日々

伊 沢 典 雄

105

一九六八年～一九七二年の記録より

越後・三国川本流～下津川本流下降

113

越後・北ノ又川本流

118

越後三山縦走

120

越後・水無川北沢

122

越後・水無川真沢

124



越後・郡界尾根～越後駒ヶ岳 1975年11月

一九七三年～一九七七年

越後から飯豊へ

橋本道夫

126

一九七三年～一九七七年の記録より

積雪期縦走 越後三山・巻機山・白毛門山 はじめに

越後駒ヶ岳から巻機山縦走

郡界尾根から駒ヶ岳

奥利根源流の沢 はじめに

奥利根・利根川本流

裏越後沢中俣～越後沢右俣下降

奥利根・利根川剣ヶ倉沢

遠かった平ヶ岳

越後・北ノ又川大ビラス沢

一九七八年～一九八二年

年報の記録より

田中茂雄

150

一九七八年～一九八二年の記録より

越後・五十沢川大窪沢左俣

越後・五十沢川大窪沢右俣

南アルプス・石空川北沢～ミツクチ沢

奥秩父・和名倉沢～滝沢下降

一九八二年秋の集中山行 浅草岳・鬼ヶ面山を巡る沢

163 160 158 156 154



虎毛山塊・春川万滝沢 1983年7月

鬼ヶ面山東面・只見沢トホケノ沢  
鬼ヶ面山東面・只見沢滝沢

一九八三年～一九八七年

「わらじの五年間」

一九八三年～一九八七年の記録より

小宮 研一

168

阿武隈川本流雄滝

越後・佐梨川金山沢奥壁第三スラブ

一九八四年夏山合宿 黒薙川周辺の沢

北アルプス・黒薙川柳又谷本谷

ランダム自然人——三面川岩井又沢畑沢

南アルプス・石空川北精進ヶ滝

一九八七年夏山合宿・利根川源流域 チーフリーダー代理総括報告

奥利根・越後沢中俣

一九八八年～一九九二年

一九八八年～一九九二年の山行を振り返る

柳沢 英市

202

一九八八年～一九九二年の記録より

越後・北ノ又川芝沢左俣右沢

南アルプス・甲斐駒ヶ岳魔利支天中央壁クラックルート他

北アルプス・雲ノ平～高天原～黒部源流山スキー

谷川連峰・一ノ倉沢本谷～本谷バンド

217 213 211 208

197 195 191 190 185 184 182 180

167 165





信越・清津川長尾沢 1998年9月

北アルプス・白馬岳周辺山スキー	
信越・鳥甲山カネグラ尾根	
越後・五十沢川本谷	
一九九一年～一九九五年	
一九九一年から一九九五年を振り返って	村山秀人
一九九三年～一九九五年の記録より	
そんなバカな 谷川・幽ノ沢ここはどこ尾根	
北アルプス・槍ヶ岳北鎌尾根	
川内・早出川中杉川 [Heaven!! 中杉川]	
一九九五年冬山合宿 はじめに	
北アルプス・剣岳小窓尾根～早月尾根	
一九九六年～二〇〇〇年	
山に通い続けた入会からの五年	須田忠明
一九九六年～二〇〇〇年の記録より	
北海道・日高チロロ川～ポンチロロ川	
頸城・戸隠山P1尾根	
毛猛山塊・只見川大熊沢立柄沢右俣～中ノ沢左俣下降～二ノ沢	
毛猛山～前ノ沢下降	
頸城・能生川イカズ谷	
二〇〇〇年秋の集中総括	
274 271 267	264 261
252	
248 247 244 241 236	
228	
224 222 219	



越後・登川金山沢 1999年9月

二〇〇〇年秋の集中 毛猛山塊・黒又川中岩沢西ノ沢

二〇〇一年～二〇〇五年

斜陽 二〇〇一～二〇〇五

遠藤 淳

281

二〇〇一年～二〇〇五年の記録より

屋久島・宮ノ浦川ノ宮ノ浦岳ノ小楊子川下降

下田川内・早出川本流ノ割岩沢ノ矢筈岳ノ大川東又沢下降

越後・三国川ダムノ下津川山ノ小穂口沢北沢南沢中間尾根ノブナ沢ノ十分沢ノ

利根川横断ノ歩き尾根ノ平ヶ岳ノ荒沢岳ノ蛇子沢左俣ノ明神峠ノ大湯

和賀山塊・真木溪谷ノ和賀岳ノ朝日岳ノ五番森手前ノ赤瀨

二〇〇五年冬の集中 海谷・駒ヶ岳 音坂ノ烏帽子岳ノ海川横断ノ

駒ヶ岳ノ同西尾根

二〇〇六年～二〇〇七年

わらじの五十年、最後の二年

遠藤 徹

309

二〇〇六年～二〇〇七年の記録より

阿能川岳北東尾根ひとりぼっち

奥多摩・小川谷悪谷

白神山地・暗門川フガケ沢(西股沢)ノ赤石川ヤナダキ沢下降ノ赤石川本流ノ

石ノ小屋場沢ノ大川支流オロの沢下降ノオリサキ沢下降ノ大川

320

18 316

277



川内・杉川本流 2003年9月

第四章

追悼 八人の仲間が遺していったもの

第五章

OB・現役から わたしが創ったわらじ五十年の歴史

月報「図書室」に載った一文Ⅱ松川一男

わらじのバツジのこと

地域研究点描

総務雑感

初合宿「御神楽岳」の思い出

地下足袋&長靴

故郷への山旅——亡き父と山への想い

懸垂下降

わらじ回想

月山、鳥海山スキー

俺もわらじも五十歳

1990.5.12

わらじの仲間が好きな

活動をふりかえって

わらじと山とわたし

百周年によせて

関根幸次 331  
 永瀬保夫 333  
 橋本太郎 335  
 富張尚樹 337  
 小原義隆 340  
 山口清徳 342  
 小林隆徳 343  
 田中ひさ子 349  
 寺沢玲子 351  
 太田栄 354  
 遠藤徹 356  
 伊藤泰造 359  
 大津政雄 362  
 鈴木辰郎 363  
 三好恭子 364  
 島山健一 365



南会津・丸山岳 2007年5月

第六章

地域別山行一覧 わらじの仲間 五十年間の足あと

北 海 道	朝日連峰	川内・下田	南 会 津	奥利根・巻機山	谷川岳周辺	那須・男鹿・塩原・帝釈	丹 沢	奥秩父・大菩薩	八ヶ岳	北アルプス	南アルプス	海 外
379	382	387	392	397	405	410	413	418	421	425	429	433
東北(朝日・飯豊を除く)	飯豊連峰	会 越 国 境	越後三山・荒沢岳	谷 川 岳	上信越国境・上州の山	日光・足尾	奥多摩・奥武蔵	道志・御坂・他東京周辺	頸 城	中央アルプス	関西・九州	
380	384	389	394	401	407	412	415	421	423	429	432	

「わらじの仲間の守・破・離」	須田 忠明	366
わらじとの十年間	熊倉 彰	368
わらじ五十年にあたって	矢本 和彦	371
わらじ五十年に寄せて	渊上麻衣子	373
五十年目のわらじ	岩永 晶子	374
わらじの仲間に入会して	岩崎 正樹	376